

# 猿と人間

## 澤の舎主人

動物學者のいふところによれば、猿は人間の先祖と極めて近親であるとのこと、それかあらぬか猿の人真似といつて些細なことまで人間の真似をしたがるものである。人間が猿を捕獲するのに、常に彼の人真似する癖を利用するのである。

古來、日本に最も普通な捕獲法は毎年秋季に猿の子供がやう／＼親の手を離れた頃、戸棚のやうに拵へた大きな箱を用意して、若い猿の徘徊して居りさうな山奥の深林に入つて待つて居る。愈々猿君の少年黨が向ひの枝などにチラと見ゆると、此方では例の箱の戸を押し開けて這入つて猿どもに、これ見よがしに、饅頭や御鮓などをおいしうに食べながら、内から戸をピシヤツと閉める、頓て又開けて外に出て、一寸休息し、復た這入つて、食べながら再び内から戸を閉づる、次で再び

戸を開けて外に出て、暫時休息する。といふやうな順序を幾度もくりかへす。始めの程は猿どもも不思議な顔付をして居るが暫くすると大層珍らしさうな様子で注目し始むる、もうよい時分と此方で見込がつくと、戸を開けたまゝで遙か隔つた他

の場所へ出て行つてしまふ。さうすると、梢から瞰しつゝ、先刻來非常に好奇心に刺戟せられて居つた猿公達、今や幸に箱の持主が遠く去つたので、早速降りて來て、争つて箱の内に駆け込んで、其處に積みおかれた饅頭やお鮓を頬張つて試つゝ競うて戸にすがつて、ピシヤンと締め切る扱こんどは開ける順番だと、細いながらも猿臂を伸ばして、引いて見る、これはしたり引いても突いても開かばこそ、開かぬ道理、樞が既に落ちて居る、猿公賢にして能く真似るといへども、暗闇の箱の内、樞の落ちて居らうとは夢にも氣の付かう筈もない。キー／＼いつて地團駄踏んで切齒扼腕慷慨悲憤して居る。

そこへ豫て彼方で窺つて居つた、箱の持主が歸り來つて箱の儘を肩にして大得意で旋凱といふ順序となる。

宅へ歸つて、戸をわけて内を覗いて見ると、中には猿君一人と思ひの外、二君あることもあり三公あることもある。斷念したのになると、所謂見ざる、聞かざる、言はざる、など揃つて居ることもあるさうである。之は實際の捕獲法である。

今一つ最も簡易な捕獲法がある、それは豫め懷中に……勿論和服の方が此際便利である。……夥多の拳小の礫を梅ヶ谷のお中のやうにふくるゝまでに拾ひ込んで、扱のそりゝと例の山中に入込むのである。猿群が多數で此方は唯一人である。先方は勢を恃んで人間を馬鹿にして嘲けるやうな態度を示す、それを此方が齒痒さうに殘念さうな振ふをして、豫て用意の礫を懷中から取出して、猿に向つて投げ付ける、勿論投げる石は猿公の居る所に達しないことは此方も承知の上のこと、猿

公も亦安全界に居ることだから何の心配もしないで、唯人間のする眞似をするのが面白さに、負けぬ氣を出して、己の懷中を摘まんで人に向つて投げ付ける。此際若し人が一々地上の石を拾つて投げ付けやうものなら却て猿公共に忽ち打殺されてしまふ何せなれば、彼等は下の二本の手で拾つて上の二本の手で投ぐるから、如何に上手な人間でも、此方から一個投ぐる間に彼方から二個は確に來る況して此方は一人、彼方は多人……多猿數、たまつた話でない見るゝ中に堂々たる人間様が一人陥落して終はなくてはならぬ。

されども、そこは人間だ、そんな詰つた争はせぬ、唯飽くまでも豫て用意の懷中からのみ取出して投げ付ける。猿公共も益奮つて應戰する。併し此方からの彈丸は石ばかりだが、彼方から飛んで居るのは腹の毛ばかり……下で人間が之を受ける設備をして、其よい毛を筆屋に、よからぬ分を座布團屋に賣るべく待ち設けて居る——腹の毛がな

くなるると其次は續いて飛び散つて来るのは矢張石ならぬ腹の皮である、……大分痛むと見えてヨレては居らぬ、……腹の皮がなくなりさうになつたと思ふ頃よりか中の道具まで落ちて来る、……下で之等を受くる設備をして、早速片付けて、皮は膠屋に道具は肥料商に賣るつもりをして居る、……萬端此方は用意の上のことだから益盛に石を投げ付くる、彼方も一生懸命、腹中全く空しくなるまで戦うところは流石に敵もさるものである。が到頭、目が舞うて、高い梢から健氣の猿公もバツタリ地上に落ちて、お頭を石に當てたら顔を歪めて往生し、おいどを木の株でうつたら笑ひながら成佛する。

其處で、此方は悠々として彼を拾つて歸るといふ便法である、費用も要らねば道具もいらぬ。而かも澤山磯投げの練習をしたから、歸つて来てからベースボールのピッチャーなどには持つて来るといふエラものになり得るといふことである。

我輩は學者の一人である。苟くも學者たるものが主張をなすには根據がなくてはならぬ。さういふところから、後に述べた捕獲法はチット少し許わやしいので、どうも信用を十二分にはかけないのである。實際我輩の嘗て居つた學校に澎湖島産の小猿公一匹を飼つて居つたから、それに就いて二ヶ年間引つゞき實驗をして見たが昔の猿公は兎に角、今の猿は子供でも、ツマラない競争などには勝たなくともよろしいといはぬばかりの態度をとつて、決して自分で自分の腹の毛をむしつたり皮をちぎつたりして投げ付くるやうな、その昔、長篠城主のやうなことをしなかつた、故人先輩の説を輕々しく否定するのは後進として往々生意氣の嫌はあつたが實驗上からどうも少し大分わやしい説だと後の方を思ふ。

が一般に、諺にも猿の人真似、猿智恵などいつて、一寸したをにでも、よく小賢振つて、ホンの上滑りの真似をして、飛んでもない滑稽や失敗を仕出かすことの多いのは、猿の通性である、人間にも之を他事に思つてはならぬものも稀にはあるやうである。